平成２４年（ワ）第４９号等　玄海原発差止等請求事件

意見陳述書

～子ども達に豊かな地球を残す為に～

２０２２年１２月２３日

佐賀地方裁判所民事部合議２係　御中

原告　　澤　田　　　修（喜多方市民、劇団員）

１　私は、福島県喜多方市に住む澤田修と申します。仕事は劇団風の子東北の代表を務めています。

１９５４年に福島県喜多方市に生まれましたが、父親の仕事の関係で静岡県浜松市で幼少期を過ごしました。

大学在学中は当時深刻な社会問題となっていた水俣病の支援活動に没頭し

ました。大学卒業後も研究室に入り水俣病の水銀分析などの手伝いをしていました。

しかし、私が所属していた研究室の恩師が大学を去ることになり、私も職を失いました。大学卒業から２年目、１９７８年のことでした。

そのようなとき、子どものころに良く学校に来てくれていた「劇団たんぽぽ」の公演があると聞きました。何となく懐かしく思い、ふらっと観に行ったところ、役者さんと意気投合し、そのまま制作スタッフとして入団させてもらえることになりました。

１９８４年、会社員をしていた父親が現役を引退し、私自身も結婚したことを機に、故郷である会津に戻ることになりました。一家で福島県喜多方市に戻り、私も５年間勤めた劇団たんぽぽから当時から東北でも公演していた劇団風の子へと移籍しました。

劇団風の子は１９５０年に東京の下北沢に誕生したプロの児童劇団です。主なる公演場所は、保育園、幼稚園、小学校、中学校、高校、放課後学童クラブ、子ども劇場、おやこ劇場、文化会館などです。現在では北海道から九州まで現在では６つの劇団風の子がそれぞれの地域で活動しています。

喜多方市出身であった私は、当初は東北・信越事務所の所長としてもっぱら営

業を任されていましたが、地元にもきちんとした劇団を立ち上げたいと思い、１９９３年、劇団風の子東北を誕生させました。

2　２０１１年当時、劇団員は６人で、福島県を中心に東北６県、及び近隣の新潟県、茨城県、栃木県で年間、約２００日の講演を行っていました。

私たちが主に公演していた小規模の小学校や幼稚園・保育園などは、少子化の影響によって統廃合が進み、劇団を維持していくことは容易ではありませんでした。

そのような中、２０１１年３月１１日の東日本大震災、福島第一原子力発電所での事故が発生しました。

それまで毎年公演していた宮城県や福島県の沿岸部の幼稚園や保育園が津波で流され、浜通り地方、特に相馬郡、双葉郡からも特に子どもを抱えた世帯の多くが避難してしまい、小学校や幼稚園、保育園も移転や休園を余儀なくされました。私達の公演先も無くなり、年間にすると約３０～４０日くらいの公演が出来なくなりました。

避難指示が解除され、学校や幼稚園が再開されても戻ってくる子どもの数は震災前の半分以下でした。私達は子ども１人当たり８００円をもらって公演していま

したので、大変な減収になりました。劇団員たちに支払える給料は月１０万円ほどになりました。

放射線被ばくを避けなければならない事情は劇団員も同じです。そこに収入の減少も手伝い、次々と劇団員が去り、最後に私だけが残りました。

３　それまでは自分自身は舞台には立たず裏方を務めていた私が、プロの児童劇団として、たった１人で、福島県民のために何ができるのか。

思い浮かんだのがラジオでした。福島第一原発が危険な状態に陥り、多くのメディアが福島を離れていたとき、福島県民の情報源は地元のラジオでした。ラジオ福島では社員が会社に泊まり込み、コマーシャルなしで３５０時間以上ノンストップで放送を続けていました。地震や津波、原発事故に関する情報に加え、家族の安否確認や生活に関する疑問、質問、避難所生活などで不安に押しつぶされそうな福島県民たちの心のよりどころになっていたのがラジオでした。

私は当時のラジオを題材にして、福島の今を伝える一人芝居「フクシマ発」を創りました。脚本も制作も、もちろん主演として舞台に立つのも私一人です。ラジオの公開生放送という設定で、パーソナリティと新聞社の震災担当者を一人二役で、

時々の福島の出来事をユーモアや音楽を交えながら演じていきます。

　公開生放送という設定ですので、会場インタビューとして、観客からも自由に質問してもらいます。観客から寄せられた質問には、新聞社の震災担当者扮する私が質問に答えますので、どのような質問にも誠実に真実を伝えられるよう、情報収集に多くの時間を費やしました。

　２０１３年から始めた「フクシマ発」は、中学生以上を対象にしたものでしたが、報道をきっかけに全国から公演の依頼をいただくようになり、これまでに１０５回の

公演を行いました。また、より小さな子ども向けにも紙芝居「子どもに伝えたい話」を創り、こちらの上演回数も７５回を数えました。

4　子どもたちは正直です。福島県内での公演では、６才の女の子から、「ちゃんとした子どもを産めるのかしら？」との質問を受けました。中学生の女の子からも、「福島県は地産地消運動をやってきたけど、私達は恋愛も地産地消じゃないと駄目みたい。」との発言がありました。私は、込み上げてくるものを押さえつつ、新聞社の震災担当者として、放射線被ばくによる遺伝的影響について分かっていることや分かっていないこと、当時みられた福島県民に対する差別のことも、その場しのぎの嘘や誤魔化しを交えずに、答えます。

福島県内の学校で公演した際、大熊町出身の先生が、「両親が高齢にもかかわらず、原発事故のせいで会津に避難する事になり、とても心配している。特に大熊は冬に雪などめったに降らないけど会津の冬は雪で、歩くのも大変だろう。転んでけがなどしなければ良いが…。」と言っていました。大熊町役場が会津若松に移転し、多くの町民も避難したのです。慣れない土地での生活は特に高齢者にとっては大変なのです。福島県民の震災関連死は、２３３１人（２０２１年現在）になって

いて、被災三県の岩手県、宮城県と比べ突出しています。

福島県外での公演では、子どもといっしょに避難したお母さんから、地元に残った父親と離婚したことや、県外に避難した子どもが避難先の学校でいじめに合い、不登校になったことを告げられることもありました。文部科学省の調査では、明らかになっただけでも約２００件のいじめがあったそうです。福島からの避難という事がわかれば、嫌がらせにあったり差別されるのです。

原発被害は、人間だけでなく動物にも影響を与え、牛、豚、鶏も殺処分されました。農業、林業、漁業にも観光業にも生産業にも被害を与えました。本当に、平穏に暮らす県民の生活を全て奪ってしまったのです。６才の女の子にまで「ちゃんとした子どもを産めるのかしら？」と言わせる世界を創ってしまったのです。

そういう意味では、日本国憲法に保障されたはずの人間らしく生きる権利や家族いっしょに暮らす権利、いかなる国民も差別されない権利、居住、移転、職業選択の権利、健康で文化的な最低限度の生活の権利、これら全てが奪われたのです。全ては原発事故が原因なのです。

先日、国連人権委員会任命の専門家（セシリア・ヒメネス・ダマリー氏）による福島の原発事故避難者に対する実態調査が行われ、記者会見がありました。そ

の専門家は、国内避難民を強制避難者と自主避難者に区別することは国際人権法に基づかないものであり、早急に支援の格差を是正することが大切だと言っていました。また、福島県が、自主避難者に対する住宅補助を打ち切り、立ち退きを求めて訴訟を提訴していることは明らかな人権侵害だと指摘しました。

5　岸田総理は、原発の再稼働を積極的に進めようと、延長期間の２０年の見直しを検討し、なお且つ、新規の原発の建設も計画に入れるそうです。私にはとても理解できません。

　私は先日、「世界で一番安全な場所」という映画を観ました。これは、世界で最も著名な原子力学者が、映画監督といっしょに世界中の原子力発電所から出た核のゴミの処分場に適応できる場所を探していくドキュメンタリーでした。結局、世界中どこを探しても核の最終処分場に適応する場所は見つからなかったという内容です。

　様々な課題や問題を考えると、これ以上原子力発電所を稼働してはいけないというのが私の意見です。何よりも、かけがえのない地球をこれ以上汚さないで、子どもや孫の世代に渡していきたいし地球上の生物の全ての生命を大切にしたいので、原

子力発電所に異を唱えるものです。もちろん、核兵器もです。

以上